ロシアの技術・職業教育の現況

——1992年春のハバロフスク教育視察の概要——

佐々木　享

１．はじめに——ロシアの学校体系

私たち技術教育研究会の代表団は、去る92年３月末から４月初旬までの１週間、ロシア連邦のハバロフスクを訪問し、技術教育関係を中心とした12の教育施設を視察してきた。１行は、会員の有志11名に、日ソ協会の機関紙『日本とソビエト』を通して私たちの企画を知って参加された藤井悌彦氏と村田豊美氏をくわえた13名で、添乗員には田中かな子氏をお願いした。

各施設ごとの紹介は他の人によってまとめられているので、ここではロシア連邦の学校体系の概要を、私たちが視察した教育施設を中心にのべる。

①幼稚園

幼稚園は、３歳児から６歳児までを受け入れる。その教育機能は日本のそれとほぼ同じと考えてよい。この就学前教育は、義務教育でなく、有料である。以前は保育所の機能を合わせもった保育・幼稚園があったけれども、母親に３年間の保育休暇が与えられるようになったので、実態としては幼稚園に一本化されつつあるらしい。

幼稚園には、自治体立と企業立とがあるらしい。私たちが訪問した幼稚園は企業が設立しているものだった。

②中学校

普通教育は６歳で中学校に入学し、第11学年まで続けられる。前回（1982年）に訪ソした当時の普通教育は７歳で入学する10年間であった。80年代の教育改革の結果、就学年齢を１年早めて11年制となったわけである。

11学年のうち、１～４学年が初等教育で、日本と同じく学級担任が原則として全教科を担当する。５～11学年が中等教育で、その授業は教科担任制である。強いて分ければ、５～９学年が前期中等教育、10～11学年が後期中等教育ということになる。

ハバロフスク市内の普通中学校89校は、すべて11年制学校とのことであった（農村部では９年制学校もあるらしい。９年制学校の卒業者は、10～11学年を他の学校で学ぶことになる）。私たちは、11年制の普通中学校を２校訪問した。

ロシアの中学校には、低学年から音楽、体操などの特定の教科、あるいは特定の外国語の教育を重視する学校がある。このシステムは、最近の政情の変化でも変わっていないらしい。私たちが訪問した第３番中学校では、低学年から日本語教育を導入していた。

③労働教育

普通中学校の労働科の週時間数は、第12番中学校で尋ねたところ、第１～４学年では２時間、第５～９学年では４時間、第10、11学年では６時間であった。ペレストロイカや政変にもかかわらず、少なくとも現在のところ、労働教育重視の姿勢に変化はないように見え

た。

第10、11学年の労働教育は、ハバロフスク市の場合、各行政区に１か所ずつ設置されている教育－生産コンビナート（ウーペーカー）に週１日通う形式で実施されている。ウーペーカーは、企業が施設設備と指導員を提供し、複数の専門コースを開設している。ウーペーカーには、10、11学年生だけでなく、近隣の中学校の５～９学年生も通っている。なお60万都市に５校というウーペーカーの数は少ないと思ったら、ウーペーカーには分校もあるらしい。

④中学生の進路

子どもの進学経路の分岐点は、第９学年修了時と第11学年卒業時と２回ある。

第９学年を修了すると、(A)そのまま、その学校の10、11学年に進む者、(B)テフニクムなどの中等専門学校に進学する者、(C)中等職業技術学校に進学する者、という３つの経路に分かれる。やや乱暴だけれども、日本の学校体系になぞらえると、(A)が普通高校、(B)が５年制高専、(C)が職業高校ということになろう。

11学年卒業者は、入学試験を経て大学（ウニヴェルシチェートあるいはインスティトゥート）に入学することができる。そのほか、テフニクムなどの中等専門学校、中等職業技術学校にも、11学年卒業者を受け入れるコースができている。

また、最近は、11学年卒業を入学資格とするリツェイと称する学校、あるいはカレッジと称する新しいタイプの教育施設も生まれている。私たちが視察した商業リツェイは、昨年、中等職業技術学校から転換した学校だった。また、電気通信テフニクムは近くカレッジと改称する予定とのことであった。

⑤中等職業技術学校

中等職業技術学校（エス・ペーテーウー、又は略してペーテーウー）は、中等教育と職業教育を施す学校である。９学年修了者を受け入れる修業年限３年の課程を基本とするけれども、私たちが訪問した第７番ペーテーウーのように専門によっては４年の課程もある。専攻する職業教育の内容は、日本の職業高校とちがってかなりこまかく分かれている。

中等職業技術学校には、11学年を卒業してから入学するコースもある。このコースでは、職業技術教育のみを課し、その修業年限は専門により、１～２年である。

ハバロフスク市内には、89年には18校のペーテーウーがあった。このうち１校が昨年からリツェイに転換したので、現在の同市のペーテーウーは17校である。私たちは、第30番ペーテーウー（造船関係の専門を教えている）と第７番ペーテーウー（電気関係の専門を教えている）とを視察した。

⑥商業リツェイ――新しいタイプの学校

私たちは、「商業リツェイ」と呼ばれ、商業科と技術科とを併置する学校を訪問した。このリツェイの修業年限は、11年制中学校卒業後２年間、または９年制修了後４年間である。商業科で教えるのは、商業、会計、商店の経営の由。技術科で教えるのは、コック、食料や料理のマネージメントである。

入学資格や修業年限という点でみると、この４年課程は中等専門学校（テフニクム等）に相当し、２年課程は日本の短期大学に相当するものである。生徒数は計700名。男子は20％。昨年９月に発足したばかりの学校であるから、旧制度の生徒数をふくんでいる数字であるようにおもわれる。70名の教員と20名の職員がいる。この学校の人気は高く、入学は４人に１人という厳しい競争だったという。

この学校でも、授業中の校内を視察した。料理の原価計算をしているいわゆる座学の授業、ケーキや菓子を焼いている授業、食品の質（栄養価？）を調べているところ、レジスターの操作、等々である。たまたま試験をしている教室もあった。解答した答案を持って教師の前に座り、口頭試問を受けている（す

なわち筆答のうえで口頭試問を受けている）ところだった。他方、実習施設の一環らしいけれども、校内に喫茶店（バー？）の施設があったのには驚いた。

リツェイは、ハバロフスクにはまだ１校しかないけれども、近い将来もっとふえるであろうともいわれた。なお、商業リツェイの前身校＝第41番中等職業技術学校が教育していた専門は、『ハバロフスク市の高等教育施設、テフニクム、ペーテーウー』によると、①料理人、②菓子製造人、③食料品の販売員、④工業的商品の販売員、であった。これらが技術科に継承されたのであろうか。

リツェイというと、私たちは、ロシア人が敬愛してやまない詩人プーシキンが学んだ学校を想いおこす（そういえば、ハバロフスク教育大学の玄関前には詩人の像があった）。学校名も自由化された証の一つなのかも知れないけれども、教養主義の伝統に支えられた由緒ある学校名がこのような職業教育をおこなう新しいタイプの学校名に採用されたことを、私はいささか奇異に感じた。

⑦中等専門学校（テフニクムなど）

中等専門学校は、中等教育と専門教育とを合わせ施す学校である。従来は、９学年修了者を受け入れる４年の課程と理解されてきたが、11学年卒業者を受け入れる２年課程もあり、最近は後者の課程がふえているらしい。もっともこれは全日制課程の場合で、夜間課程あるいは通信制課程の修業年限はこれより長くなる。

ハバロフスク市にある中等専門学校は18校であり、その専門別の内分けは、生産技術系５、建設系３、交通通信系２、林業測量系１、経済学系３、医療技術系１、教員養成系１、文化・芸術系２である（1987年現在）。中等専門学校にはテフニクムと称する生産技術系の学校が多い。私たちは、鉄道テフニクム、電気通信テフニクム、工業テフニクムの３校を視察した。

⑧大学

ロシアの高等教育施設は、11学年卒業を入学資格とし、修業年限は、全日制課程の場合、医科大学（医学部）は６年、その他は５年である（まれに４年の課程もある）。

ロシアの高等教育施設（原語はブース、日本語ではこれを大学と訳していることが多い）は、総合大学（ウニヴェルシチェート）と単科大学（インスティトゥート、専門大学と訳されることもある）に大別される*。解体直前の1990年のソ連には、71校の総合大学をふくむ911の高等教育施設があり、全日制課程に305万５千、夜間課程に46万５千、通信制課程に164万２千の学生が学んでいた。

＊ちなみに総合大学（ウニヴェルシチェート）とは、「科学的知識の基礎を構成する科学を総合することを教える高等教育施設。国民経済の諸部門や科学、文化の専門家を養成し、科学研究を遂行する」と説明されている（『ソビエト百科事典』）。他方単科大学（インスティトゥート）は、「国民経済の諸部門や文化・保健（工学、エネルギー工学、教育学、医学、法学など）を４～６年で教える高等教育施設の名称」とされる（同上）。共通点があるけれども、前者は科学の基礎を教えることを重視し、同時に研究機能をもつ点が強調されている。

教育大学は単科大学の一種で、90年には全ソ連に198校あった。

ハバロフスク市にある高等教育施設は、次の13校で、総合大学はない。

1　医科大学
2　教育大学
3　鉄道大学
4　工科大学
5　体育大学
6　文化大学
7　経済大学
8　薬科大学
9　高級民警大学

10　高級軍事建設大学
11　全ソ連通信制法科大学の学部
12　通信制ソビエト商業大学の分校
13　ノボシビルスク電気通信大学の通信制分校

このうち9、10は特殊な目的の学校、11以下の3校は他の都市にある大学の通信制課程の分校だから、独立校としてのふつうの大学は8校である。8校のうち最も大きいのは、鉄道大学と教育大学である。私たちはこの2大学を訪問した。

2．ハバロフスク教育大学

技教研のロシアの教育事情視察団が教育大学を訪問したのはこれが初めてなので、ややくわしく紹介しておく。

ハバロフスク教育大学は、物理・数学学部、生物・化学学部、歴史学部、美術学部、外国語学部、ロシア語・ロシア文学学部、体育学部を置き、普通学校上級学年（日本流にいえば中等教育）の教師養成を主とする大学である。外国語学部で教えている外国語は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語であり、将来朝鮮語も教える計画であるという。ごく最近、日本語のコースも開設された。それぞれの学部は大学院課程（アスピラントゥーラ）があり、最近、（いくつかの学部にはカンディーダートナウーク（日本でいえば博士課程か）もできたという。副学長のバリツキー氏によると、このハバロフスク教育大学はインスティトゥートといっているけれども、日本やアメリカの大学（ユニバーシティ）の性格をもっている。

実際、学部構成や大学院コースがあることなどから見て、そういってもおかしくないようにおもわれる。

学生数は約4,000名、うち昼間課程の学生は約2,500名で、残りは夜間及び通信教育課程に在籍している。遠隔地の学生は通信教育が基本となるが、ハバロフスク市内の者は夜間に通学することもできるからである。ロシアの大学はすべて5年制（夜間課程と通信教育課程および医学部だけが6年制）と思い込んでいたけれども、ハバロフスク教育大学には4年制と5年制とがある由であった。どういう場合に4年制と5年制の違いとなるのかは、聞きそこねた*。

＊この学校でもらった『ハバロフスク教育大学概要』によると、外国語学部には、1外国語のみを専修する4年コースと2外国語を学ぶ5年コースとがある、とある。他の学部に4年コースがあるのかどうかは不明。

なお、同大学の『大学概要』によると、ティーチング・スタッフは391名である。学生数や教員数からみたこの大学の規模は、わが国の東京学芸大学に相当する、と田中喜美氏は言っていた。

カリキュラムの構成は、歴史学部を例にとると、教育学約20%、社会科学約30%、残りの50%が専門とのことであった。教育実習は、第1～3学年では、子どもに馴れ親しませる目的で年に1～2週間、第4、5学年は、主として農村の学校で年に1.5～2か月の本格的な実習を課する由であった。

卒業生のすべてが教師になるわけではない。教師になる者の割合は学部によって異なり、最近までは、外国語学部30%、歴史学部50%、生物－化学学部60%、美術学部10～12%という状況だったという。教師以外の就職先は、政府機関、共産党、企業などで、美術学部では美術家になる者が多かったらしい。ただし、ペレストロイカ以前は、大学が就職の世話をし、就職したら3年間はそこに働く義務があったけれども、今後はどうなるかわからないという。

目下のところ受験生のこの大学への人気は高く、成績は平均4以上でないと入れない。外国語学部などは12倍もの競争率になるという*。ちなみに、ロシアの成績評定はいわゆる絶対評価で1～5でつけられる。教師の給

与はむしろ低いのに人気が高いのは何故かという質問（横山氏）に答えて、がんらい教師は女性の職業として人気が高いこと、教職以外への道が開いていること、夜間・通信教育課程については働きながら学べること、などの事情があげられた。

＊横山悦生氏らが質問した医師夫妻の家庭では、医科大学入学の競争率は3.5倍くらいだという話題がでている。どの水準の生徒が希望するかという問題もあるので一概にはいえないけれども、少なくともいまのところ、医科大学は特別に人気のある大学ではないらしい。同医師夫妻は、自分の子どもが医者にならないことを望んでいた。

最近の最も重要な問題は、予算不足だという。日本語などの外国語の課程や労働科の教師養成を拡充したいとおもっても施設が不足するというような問題だけでなく、目下４月以降の予算がきていないので４月以降の予算がたたず困っている、と言っていた（私たちが訪問したのは４月１日だった）。予算不足を補うために、たとえば定員100名のところを120名とし、20名分については企業から金を出してもらうというようなことをしている。こういう方式で昨年は２万ルーブルの収入を得たという（このしくみの具体的なことはよくわからなかった）。

現在は学生の授業料は無償だけれども、近く改正される法令で有償となるのはほぼ確実であろう、とバリツキー氏はのべていた。

ハバロフスク教育大学で教育する専門は、『高等教育入学便覧　1991年版』によると、表の如くであった。はじめの番号は、専門の名称の番号、次に掲げられているのが専門、（全）は全日制、（通）は通信制をしめす。この『入学便覧』が発行された時には、まだ日本語コースは開設されていなかったわけである。

ハバロフスク教育大学では、労働教授の教師や初等学年の教師養成は行っていない。労働教授の教師は、このハバロフスクの近くでは（といっても、約400km離れている）コルソモールスカ・ナ・アムール教育大学で養成されている。ちなみにいえば、このコムソモールスカ・ナ・アムール教育大学はハバロフスク州では２番目に大きい都市にあり、前掲の『入学便覧』によると全寮制で、数学（全）、物理学（全）、生物学（全）、地理学（全、通）歴史学（全）、ロシア語と文学（全、通）、労働科（全、通）、教育学と心理学（全、通）、教育学と初等教育の方法論（全、通）という専門を教育している。

なお、私たちは訪問しなかったけれども、ハバロフスクには教育専門学校があり（１校）、初等学年の教師はここで養成されている。教育専門学校は中等専門学校の一つで、ふつうは、テフニクムと同様に９学年修了者を入学させる修業年限４年の学校である。前掲の『ハバロフスク市の高等教育施設、テフニクム、ペーテーウー』によると、同市の教育専門学校が養成している専門は、初等学年の教師、就学前施設の保育者、普通学校のための唱歌と音楽の教師、幼稚園のための音楽労働者、である。

３．ハバロフスク鉄道大学

この大学は1982年にも訪問している。今回得られた情報は、前回の報告（『技術教育研究』第22号、1982年８月）と重なっている部が多いので、ここでは、学部の構成だけを紹

表　ハバロフスク教育大学で養成する専門

0101	数学（全）（物理）
0104	物理学（全）
0109	生物学（全）（化学）
0207	歴史学（全、通）
0217	ロシア語と文学（全）
0220	外国語（全）（英語とドイツ語、ドイツ語と英語、フランス語とドイツ語、中国語と英語）
0303	体育（全、通）
0304	初歩の軍事教練と体育（全）
0306	製図と造形芸術（全）
0309	教育学と教育労働の方法論（通）
0310	欠陥学（全、通）〔注：障害児教育学をいう〕

介して置く。

この鉄道大学に設置されている学部は、今回渡された印刷物によりロシア語からやや直訳調に訳すと、次の通りである。

① 機械学部
② 鉄道営業学部
③ 鉄道線路建設学部
④ 工業用・民間用建設学部
⑤ 電気機械学部
⑥ オートメーション・遠隔操作・通信学部
⑦ 高等教育機関への予備学部
⑧ 本務をやめずに技師を養成する学部
⑨ 労働者の資格、鉄道従業員の専門資格の昇進のための学部

これを前回訪問の報告とくらべると、①～⑥は以前と同じで、専門別学部の一つであった「橋梁及びトンネル学部」がなくなっている。前回の報告で「進学準備課程部」と訳されていたものが⑦で、⑧は通信教育学部、⑨は再教育学部にあたるものであろう。

現在の学生数は8,000名、うち昼間課程4,000名、通信教育課程4,000名である。40%は女性。修業年限は5年、通信制課程は6年である。教員は520名の由。2600名を収容できる寄宿舎をもっている。

質問に答えて、いまの入学者選抜は、昼間部は平均2.5倍くらい、通信制課程は入試がなく企業が派遣してくる学生である。

この大学はロシア連邦国高等教育省と鉄道省の共同の所管で、予算は両方からもらっている由。カリキュラムは前者が、養成すべき専門の人数等は後者が決めるという。学長はこの大学について近いうちに資格審査委員会ができることになっているとのべた。その意味はよくわからなかった（後日判明した点については後述）。

4．ペレストロイカ、ソ連の解体と教育

ソ連では、1986年から、ゴルバチョフの指導のもとにペレストロイカが始まった。改革は、国家組織、政治・経済の各方面だけでなく、当然に教育面にも及んだ。そして、1991年8月のクーデターを契機に、覇権主義的なソ連共産党が解体され、年末にはソ連邦が解体して各共和国が独立した。ソ連の中で最も大きかったロシア共和国はロシア連邦となった。この間に、いわゆる市場経済の原理が導入され、物価は急速に値上がりした。

私たちのハバロフスクの教育施設の視察は、こうした急速な変化の途上で実施された。このため、私たちが視察して見聞したことがらのなかには、従来のソ連の教育について私たちがもっていた常識では理解しがたいことが少なくなかった。ここでは、そうした変化のいくつかについて、判明していることを書きとめておく。

① 総合技術教育、男女共学の問題

ソ連邦国民教育国家委員会が90年4月に発表した「ソ連およびソ連邦構成共和国の国民教育に関する立法の基礎」（略称「国民教育基本法」）の草案は、85年の国民教育基本法にくらべると、「教授と共産主義訓育との統一」、「教授と訓練と実生活、共産主義建設の実践、社会的有用労働および生産労働との結合。総合技術教育、労働教育」、「男女共学」といった原則が削除されているという（文部省大臣官房調査統計企画課『主要国の教育動向・1990～1991年（海外教育ニュース第11集）』1992年3月、263-264頁）。この法律は結局制定されずに終わったらしいけれども、ここから私たちは教育思想における最近の変化を読みとることができる。そしてそれは、例えば、労働科において厳密な男女共学が追求されていないことなど、に反映しているようにおもわれる。

しかし、私たちが実際に見てきたように、労働教授を重視する考え方は、なお失われていないようにおもわれる。

② 中学校の教育課程表

私たちは、2つの中学校を訪問したけれども、2校ともその教育課程表を入手することができなかった。

ソ連時代の比較的新しい教育課程表としては、1989年12月28日の『教員新聞』に発表されたものがある。ここでは、各教育課程表の骨格だけをしめした基礎的教育課程表と、それをもとに具体化した ①「伝統的構造型」②「普通型」 ③「総合型」という3つの表がしめされていた。これら3案では、労働科の授業は1～11学年にわたり、週2時間となっていた（選択科目や補充科目の時間があるので、学校として増加することはできる）。このうちの「総合型」の表が関啓子氏により紹介されている（『世界の学校はどう変わろうとしているか』1991年、日本標準、105頁）。

ところで、その後、1991年にロシア共和国教育省が発表した91－92年用プランがある（月日不明、福岡教育大学の山口喬氏による）。私たちは第12番中学校で聞いた労働の時間はこの表とは違っているけれども、理由は不明である。

③ 教育機関の補助的財源

私たちは、ペーテーウーや教育－生産コンビナート（ウーペーカー）で、生徒の労働による収益が学校の補助的財源にあてられていることをみてきた。また私たちは、鉄道テフニクムが学生寄宿舎の一部を企業に貸したり、第30番ペーテーウーが実習工場の一部を企業に貸したりしているのを見てきた。

これらは、ソ連邦国民教育国家委員会の1990年1月17日付命令「国民教育における財政メカニズムの基本規程」に準拠した措置らしい。すなわち、同規程によると、学校の財源は設置者たる省庁が措置する予算のほかに、以下のような収入が国民教育機関の補助的財源とされる（前掲『海外教育ニュース第11集』267－268頁）。

ロシア共和国の中学校の教授プラン　1990-90年度用

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 ロシア語	9	10	12	11	7	6	4	3	2		
2 文　学					4	3	2	2	3	4	3
3 数　学	4	5	5	6	6	6	6	6	6	4/5	4
4 情報の基礎とBT										1	2
5 歴　史					2	2	2	2	3	4	3
6 国法の基礎									1		
7 一般社会											2
8 周囲の世界の案内	1	1									
9 自　然			1	1	1						
10 地　理						2	3	2	2	2/1	
11 生　物						2	2	2	2	1	2/1
12 物　理							2	2	3	4	4
13 天文学											1
14 化　学								3	3	2	2
15 製　図							1	1			
16 外国語					4	3	2	2	1	1	1
17 造形芸術	1	1	1	1	1	1	1				
18 音　楽	1	1	1	1	1	1	1	1			
19 体　育	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
20 労働と職業	2	2	2	2	2	2	2	3	3	4	4
21 ＨＢＰ										2	2
小　計	20	22	24	24	30	30	30	31	31	32	31/32
22 生産労働		1	1	1	2	2	2	3	3	4	4
23 選択の課題							2	2	2	3	4
24 労働の実習（日）						10	10	20	ー	20	

○国、協同組合、公共企業・団体との契約による、または住民からの注文に応じた財・サービスの提供に対する収入。

○教育・生産活動において生産した製品を換金することによる売上金。土地、建物、設備を賃貸することによる収入。

○契約による要員養成、資格向上、再教育及び住民の注文に応じた教育に関する補助的サービスによる収入。

○国、協同組合、その他の公共企業・団体及び個々の市民からの寄付及び物資的財産の譲与。

この規程は1990年中に実

施すべきものとされてたから、ロシア連邦にもそのまま継承されたのであろう。私たちは、その運用の実態を見せられたわけである。

④ 新しい学校制度の創設――リセ、カレッジなどの新しいタイプの学校

私たちがハバロフスクで視察した学校のなかには、商業リツェイという新しいタイプの学校がふくまれていた。また、私たちが訪問した電気通信テフニクムでは、この学校は近くカレッジと改称する予定であるという話を聞いた。リセ、カレッジは、いずれも、10年前にはなかった新しいタイプの学校である。新しいタイプの学校としてはこのほかに、私たちは訪問しなかったのでハバロフスクにあるかどうかは不明だけれども、ギムナジアと称する学校も生まれているらしい。

こうした新しいタイプの学校について、つぎのような解説があったので紹介しておく（前掲『海外教育ニュース第11集』282頁）。

「ギムナジア」は、通常第１～11学年を対象とし、古典などの人文系の教育を重視した教育を行う普通教育学校の名称である。一方、「リセ」は、通常第８～11学年を対象とし、人文系の教育にも力を入れながら理科系の教科に重点を置いた英才教育を行う普通教育学校と、特定の職業分野に関わる教育を行う中等専門学校及び職業技術学校につけられている名称である。また「カレッジ（高等職業学校）」は、大学１・２年レベルの高度な専門教育を行う新しいタイプの中等専門学校である。これらの新しいタイプの学校は、いずれも、1989年度より各地に開設されはじめた。

ここにいう「リセ」は、ロシア語でいうリツェイにあたる。これによると、リッェイには、多様な形態があり、① 第８～11学年対象の英才教育を行う学校、② 特定の職業分野の教育を行う中等専門学校あるいは職業技術学校などがふくまれるらしい。高杉一郎氏がシベリアのタイシェットで出会ったリセの学生は①のタイプのそれであり（高杉一郎『シベリアに眠る日本人』岩波書店、1992年、76頁）、私たちが訪問した商業リツェイは②のタイプのものであったことがわかる。いずれにせよ、こうしたタイプの学校の出現は1989年度以降のことで、教育におけるペレストロイカの一環をなすものである。

⑤ 学校の資格の判定、廃校

私たちは鉄道テフニクムの校長から、近いうちにハバロフスク市内のテフニクムでは倒産する学校が続出して、５年以内に半分になってしまうかも知れない、という衝撃的なことばを聞いた。また鉄道大学では、近いうちに資格委員会ができることになっているという話を聞いた。いずれの場合もそれ以上くわしい説明がなかったから、公立の学校がなぜ倒産するのか、資格委員会とはどのような役割をもっているのかなど、不明のままに帰国してしまった。

帰国してから、資格委員会とは各種の教育機関に対する審査機関をさすことがわかった。すなわち、ソ連邦国民教育国家委員会は、1990年６月14日付の同委員会命令として、各教育機関における教育の質に対する国家－社会的コントロールを改善することを目的として、初等中等普通教育学校、職業技術学校、中等専門学校および大学の審査のための暫定規程を定めていたのである（前掲誌、270－274頁、以下の叙述はこの資料により要約したものである）。

「中等専門学校の審査に関する暫定規程」によると、その概要は次の如くである。すなわち、この審査は各学校を直接直轄する行政機関が組織した審査委員会により、通常５年に１回行われる。審査は、卒業試験および卒業論文（製作）等の審査、審査委員会が行う筆記試験、学校側が提出するデータなどにより、20日以内に行われる。

資格審査委員会は、詳細な報告と、「資格あり」、「資格なし」あるいは「第一次審査終了（要再審査）」の３段階の評価を付した審

査結果を当該学校を所轄する行政機関に提出する。

審査結果が承認されると、「資格あり」と判定された学校については、所轄の行政機関により、物質的・精神的に奨励され、学校の裁量権を拡大する方策が検討される。

「資格なし」と判定された場合には、その原因が詳細に分析され、「問題点の解決策を講じ、3か月以内に一定の手続きに従い、学校を再組織ないし専攻変え、あるいは廃校することを勧告する」とされている。

鉄道テフニクムの校長がハバロフスク市内では倒産するテフニクムが続出するだろうといったのは、たんに財政的な破綻だけでなく、この資格審査を想定していたのかも知れない。

「高等教育機関の審査に関する暫定規程」によると、大学に対する審査では、① 教育活動、研究活動をふくむ大学のあらゆる方面における活動の審査、② 物質・技術的な面の審査、③ 大学の附属設備の審査が総合的に実施される。審査の結果には、「資格あり」、「資格なし」あるいは「第一審査終了(要再審査)」の判定が与えられる。

「資格あり」と判定された場合は、大学のランク付けが行われ、人事・財政面での自治権が付与される。「資格なし」と判定された場合、3か月以内の廃校、再編あるいは「資格あり」と判定された同一共和国内の同じ専攻分野を持つ大学への統合を決定しなければならない、とされている。

以上略述した「暫定規程」は、過渡期なので不明な点が多いけれども、鉄道大学の学長の話から推察して、ソ連解体後のロシア連邦にほぼそのまま継承されているのかも知れない。

5．おわりに――現代ロシアの教育をどうみるか

ロシアの技術教育、職業教育をどうみたらよいのか。少し辛口で私の印象と疑問を率直に記してみよう。

私のような年齢層の者は、総合技術教育(ポリテフニズム)を社会主義のすぐれた教育思想でありシステムであるとして学んできた。その総合技術教育ということばは、10年前に同じハバロフスクを訪問した時すでに聞かれなかった。今回もそうである。しかし、中学校の普通教育における労働科はいまなお重視されており、その授業にはポリテフニズムの精神がいまなお生きている、とみるのは楽観に過ぎるのだろうか。

社会主義の教育思想のなかで強調されてきた労働と教育を結合させるという思想は、普通教育の労働科と教育－生産コンビナート(ウーペーカー)という新しいシステムのなかに生かされている、と10年前に訪問したときの私たちの目には映った。それは、今回の訪問でも少なくとも今の段階では変わっていないように見えた。しかし、私たちの訪問したウーペーカーやペーテーウーの校長が言っていたように、収益性が強調されるようなら、生徒の労働に収益を期待するのは現実的ではないという意味で、ウーペーカーの未来は明るくないといわなくてはならないだろう。

ところで、まずここでは労働科の各テーマの性別履修の状況や、各学校の生徒・学生における性別構成についての感想をまとめておく。

私たちが訪問した2つの中学校の高学年の労働科の授業や教育－生産コンビナートでは、裁縫、手芸関係の授業には女子、木工、金工関係の授業には男子というように、事実上性別に分かれていた。問いただした結果、生徒自身の選択の結果だと説明されたけれども、教師たちがこのような性別分化に疑問や問題を感じている様子はなかった。ここには、以前から指摘されているように、労働の世界で女子差別が解消され、職業の各方面への女性の進出が著しいにもかかわらず、家事は女子という性役割分業が強く残っていることの反

応なのかも知れない。

性による専門の分化は中等職業技術学校（エス・ペーテーウー）でも顕著で、今回私たちが訪問した第30番ペーテーウー（電気関係）でも生徒の殆ど全部が男子ということであった。これとは反対に、商業リツェイでは生徒700名のうち男子は20％に過ぎなかった。

労働科における男女のテーマ別分化の傾向や、工業系には男子が圧倒的に多く、商業系には女子が多いというペーテーウーの傾向は、どの位一般的な傾向なのかにわかには判断できない。私たちが視察した学校に見る限りでは、日本の中学校や職業高校と似た事情にあるといえる（日本の高校については拙稿「高校における男女共学の現状と家庭科」『名古屋大学教育学部紀要――教育学科』第38巻、1992年３月、を参照）。従来からそうだったのか、最近になってこうなったのかわからないけれども、これは意外だった。

鉄道テフニクムの学生のうち、女子は約10％とのことだった。工業テフニクムでは、数字は少し古いけれども、全日制課程の学生の半数は女子とのことだった。電気通信テフニクムでは、学生の性別内訳を聞きそこなった。鉄道大学の女子学生は約40％だから、鉄道テフニクムの女子が少ないのはやや不思議な気がする。しかし、いずれにせよ、テフニクムの女子学生の割合は、工業系のペーテーウーの女生徒の割合よりはずっと大きいらしい。

テフニクムや大学の学生中の女性の比率の高さは、各学校における女性教師の比率の高さを反映しているといえよう。実社会における女性差別が縮少し、女性自身の意識が変わってくれば、わが国もこうなるのかも知れないと私にはおもわれた。

それだけに、教師の賃金は男性にとっては安いので他の職業に転じてしまう、という工業テフニクムの校長のことばは意外だった。このことばがたんに教師の賃金の低さを表しているに過ぎないのかどうかは、もっと研究してみないと何ともいえない。

中等職業技術学校（エス・ペーテーウー）――以前の職業技術学校を中等学校に昇格させた学校――や中等専門学校（テフニクム）の専門教育では、わが国の工業高校や高等専門学校の現実からは想像もできないくらい細分化された教育をしている。『朝日新聞』は、以前職業技術学校はわが国の職業訓練校にあたると書いたことがある。新聞記者の眼にはそうみえたのであろう。職業技術教育や中等専門教育のこのような細分化は最近になって始まったものではなく、10年前もそうだった。おそらくかなり以前からそうだったに違いない。文盲の国ロシアが社会主義的な近代的工業国へ急展開するためには、細分化した職業教育が過渡的に必要だったというなら理解できる。しかしそれが工業化をある程度達成した1950年代以後になお続いているということになると、中等レベル以上の職業技術教育や専門教育では、クループスカヤの時代から指摘されていたにもかかわらず、総合技術教育の思想は生かされて来なかったといえるのかも知れない。

職業技術教育や専門教育の細分化は、おそらく分化した専門（スペチアリノスチ）やその水準（格付け）が賃金算定基準と関連しているために強固に存在しているのだとおもわれる。そうだとすると簡単には崩れないかも知れない。労働者の賃金をその熟練（クバリフィカーツィア）の格付にもとづいて定める慣行は、明らかに西ヨーロッパ文化圏のものである。私は前回も今回も、教育とくにその専門と賃金算定方式との関係を調査していないので明言はできないけれども、職業教育あるいは中等専門教育システムという点だけでいえば、西欧文化の古典的形態が現代に生きている感がある*。しかし、学んだ専門と関係のない方面に就職する者も少なくないというから、現実に迫られて改善されていくのかも知れない。いずれにしても、ロシアにおけ

る職業技術教育の専門分化した学科の存在構造は、私たちにとってのソ連邦教育史研究の欠落部分の一つである。

＊1980年にロシアの教育施設を視察した際のまとめのなかで、田中喜美氏も同様のことを指摘していた（田中「中等職業技術学校」『技術養育研究』第18号、1980年８月、29頁）。

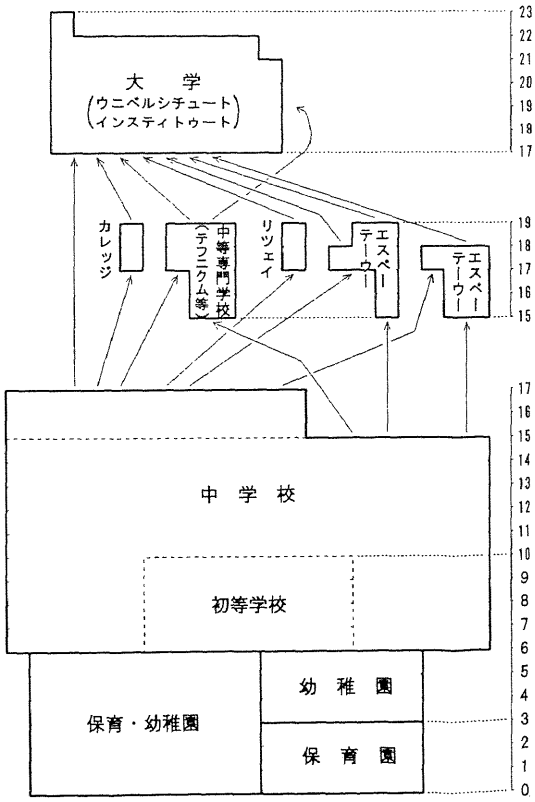
なお私は、ロシアの初等中等教育の学校体系については、① 11年制学校、② ９学年修了で入学する４年制の中等専門学校（テフニクムなど）、③９学年修了で入学する３年制の中等職業技術学校の３本建を基本とすること、大学は５年制が基本で医科大学だけが６年制である、というようないわば固定観念をもっていた（夜間課程、通信制課程は別として）。ところが、各学校の入学資格や修業年限は意外に多様であった。11年制学校の普及に伴って11学年卒業後の学校が発達してきたことは理解できる。しかし第７番エス・ペーテーウーのように４年制のエス・ペーテーウーがあったのは意外であった。この学校は電気の専門を教えているので、恐らくその専門の教育を充実させるために修業年限をのばしたものであろう。こうした学校体系の改編にみられるような柔軟性が、専門分野の細分化をも柔軟にしていくことになるかどうかは、興味深いところである。

すでに80年と82年の２回にわたってソ連の技術教育、職業教育を視察してきた私たちは、リアルに現実を見ていたから、いたずらな幻想をいだくことはなかった。その意味で今回の訪問でも驚きはなかった。財政上の困難や職業技術学校には勉強嫌いの子どもがいて困るなど、校長さんたちが悩みを率直に語ってくれたことが、前回の訪問との違いの一つだった。

ソ連邦の解体、官僚的で覇権主義に陥っていたソ連共産党が崩壊したあと、エリツィンの指導するロシアがいかなる方向に歩もうとするのか、まだはっきり見えない。教育についてもそうだ。いまの段階では、エリツィン大統領は、近代的あるいは資本主義的な意味での合理主義を欠いたまま、資本主義に幻想をいだきながら、経済の自由化の名のもとに空想的資本主義を追いもとめているように私には見える。資本主義世界には見られないソ連の教育の強みであった筈の教育の無償制原則を撤廃したり、中等専門教育や高等教育の通信制課程や夜間課程を縮少しようとしているのもそうである。私たちの見た限り、いまでさえそう金をかけているとはおもえないのに、いまより教育予算を削って、どのように国家の未来を描こうとしているのか、解しがたいところである。

近代的あるいは資本主義的合理主義の欠落は、１週間滞在したに過ぎない私たちにも、街中のいろいろなところからかいまみられた。

ロシアの学校体系の概念図（全日制のみ）



新しい学校として紹介された商業リツェイでもそうだった。キャッシュレジスタを学校で教えるなどということは、発達した資本主義の世界では想像もできない。生徒へのサービスの一環としてならとにかく、喫茶点（バー？）を教育施設として学校内につくるなどという発想もそうである。商業を教えるということならば、合理主義を土台とした複式簿記をしっかり学ばせることから始めるのが基本なのではないか、と私にはおもわれた。レーニンが革命後の青年たちに簿記を学べと繰返して強調していたことを、たらいの水とともに流してしまう愚が行われようとしている、といっては言い過ぎだろうか。換言すれば、その肖像ではなく、レーニンの教えを残して発展させることが必要なのではないだろうか。いまなおペーパーテストを嫌い、商業リツェイで一例が見られた如く試験では面接を基本とするといううらやましいくらいしっかりした教育方法の思想をもつ国で、どうして安易な（としか見えない）改革が行われようとしているのか、私には理解できなかった。

テフニクムの実験室や各教科ごとの教室の展示物、動態模型にくふうがこらされ、充実していることは、驚きだったといってよい。こうした優れた教育方法の理念をもつ国の経済が脆弱化したりするのだから、政治はむずかしい。ロシアの教育にもいろいろな弱点はあるのであろうけれども、こうした優れた点は今後とも発展させて欲しいものである。

日本語教育を導入した第３番中学校をはじめいくつかの学校の校長や教師が、日本との交流（ないし日本の援助）を望んでいることを表明していた。私たちはいわば私人として訪問したに過ぎず、視察だけを目的としていたので、こうした要望に応える準備がなかった。しかし今後は、民間レベルをふくめて、交流・援助が有益であろうことを痛感したことを書きそえておきたい。

さいごに、国家組織の変革、経済事情の困難化という悪条件が重なるなかで、資本主義国の教師の私的な一団に過ぎない私たち視察団を快く受け入れ、多くの教育施設視察をアレンジして下さり、可能な限り歓待してくれたロシア日本協会ハバロフスク支部の人びと、参観の場を設定して下さった12の教育施設の教職員の方々に心から感謝したい。私たちの視察は、驚く程に友好的な雰囲気のもとに行われた。私の知る限り、ロシア側の責任に属する齟齬（そご）は全くなかった。困難な条件のもとでも善意と友好精神を決して失わないところにロシア人の偉大さが表れている、といってよいのであろう。

附記。

この報告をまとめるについては、めんどうな仕事に心づかいをして下さった田中喜美事務局長をはじめとする同行の方がたの談話や感想、提供して下さった手記や写真などを参考にさせていただいた。とくに、多忙のなかをいち早くまとめて下さった差ヶ久保悟氏の手記や、井上平治氏が寄せて下さった長文の手紙、１日を第３番中学校で過ごされた村田豊美氏のメモは有益であった。記して謝意を表する。もちろん、この文章のすべての責任が私にあることがいうまでもない。

（1992年６月11日記）

〔お詫びと訂正〕

本誌39号の中島篤之助氏の論文「地球環境問題と原子力」12ページ第３表「主要国におけるＧＮＰ当りのエネルギー消費」のＧＮＰはＧＤＰに訂正して下さい。編集ミスでした。お詫びかたがた訂正します。